

へ巻13
1731
4-2



根有之久佐ニ事
 抄物云の源鶴と云ふ地味子代あきこの始はつ三照石
 氷け日の本を治かきめあふ子出才素幾為そこのる出性うまれつ質
 志子やんままああああ何なもも麻あ却かああ極たく
 ぞぞららくくををああああああ神かみはは神かみはは熱あああひひてて何なのの世
 のああ本ほん丹にままくくハハ江え末まつんんももととああーーととててああくく出で矣
 又またちちりりくくれれどどももええーーいいととんん志しややリリママああいいががいいああくく
 ららくく清せい射せああいいずず清せい中ちゆういい海かいくくのの無むちちがが子こももト
 けけれれハハ大だい神かみ悟ごずずーーてて天てん石せき窟くつ小せう入にゅうちちーーてて懸けんをを代
 閉ひくく勢せいああふふああふふニニ入にゅうるる内ない常じょう園えんああーーてて屋おく頂ていのの相あひ代



とせあらざる神の神々は神燈挑灯まきも用を
兼しあらが何があくまきも神燈挑灯まきも用を
あらば倭小幡燭沖の切との次子子世傳と
するが京神の力もと自中ふあらぬいさし
れは中心下みくハ挑灯とほすともあどしあらさ
まびる世の神事ハの神あどハつりぬぬ返り
かけて神たちも相合神挑小相合町くも
あく燭燈のたゆらほとあしされども神燈挑
高お神相とくちあもあれず公ハ持出さ
とらりかり子中つあつハあきく是神のまかちを

神燈

竹かきけは先世の中は神々もあやまハ名々の神
も空の神ハ神々もあやまハ名々の神
あひまらるる神燈挑灯まきも用を
とせ或れいつゆふもあやまハ名々の神
神燈挑灯の神燈挑灯まきも用を
とせ火どああらうあハ干度まきも用を
ハ土農工商の神ハ神燈挑灯まきも用を
とせ火どああらうあハ干度まきも用を
日あともあまともあく花の時なら神燈挑灯まきも用を
とあくありゆき家ハ神の神々もあやまハ名々の神

結句破ちて来るものも多かり〜が流石に
世もかまざす〜くありけれは境より持者を
なくする人様子さんちやあり河原切家不主
までさ〜も多かり〜河原の客を科戸の風は
天の八重をやらむつ〜のまら〜御来が
を境の敏徳を〜お掃ふるので〜と
とあるをりらされは志ハ夫婦ハ流痛ハ百や
りてあり者ち〜河原コリマア〜からよ
からよ〜人様不敏とやらハの身とぬり之
て〜く河原の境とち〜く口不流〜の〜すれ

ととも目下流の客は又借の客を流石高き
拂ぬ〜流ぬぬ〜と〜かむ屋を相も〜と
が世ら〜紙花を境良客の卦不當〜の
悔云〜おと下押〜と〜と〜と
只〜と〜と〜と〜と〜と〜と
世ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と
天〜と〜と〜と〜と〜と〜と
さ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
れ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ぬ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

さし一決せりし一爰不近松氏の祖と云神
進出て室のけり中くおのりあては接接は在
あおまどを神事不精な好あへは思戸のお
みく物な初多は振て思戸我用り也あへし
と中りれは思く重振をあり是ハ怪子苗り家
強向ありとて振振者とり振れり先立振荒
り角也つらとての一枚着板も力雄神丹あ
不修りあつしきり神あり天児屋多歌
汲りたる金もけてこそ此名もとて記す振を
若母房方娘方おは振不修り引名めても女

形のてん。めん天。細女。今。ま。か。居。あり。新。下。り
藝。府。中。涉。ず。お。も。才。四。番。目。ま。て。仕。出。目。小。か
け。修。り。り。の。さ。り。紙。明。り。都。る。ん。ま。と。ま。法。こ。へ
流。る。お。止。の。と。く。流。る。お。止。の。門。より。平
屋。の。門。く。り。れ。くの。む。い。記。の。き。波。行。ら。挑。灯
ハ。星。の。と。く。天。香。山。の。お。百。の。月。高。振。掛。を。掛。て。ん
笑。哉。か。ざ。り。孝。世。の。長。崎。も。吸。も。の。お。し。一。音
掛。れ。ハ。孝。園。の。世。と。鳴。ら。ら。地。神。く。い。さ。み。を。ほ
と。ひ。の。積。お。て。神。地。神。地。神。と。な。た。不。り。ち
是。哉。か。ざ。り。ま。ら。を。そ。け。ら。い。つ。ち。く。る。と。も。く

申末とつ子を後の人申の字は終と所履と
お初と田楽と号して書けられけりその後田の
字は口と書りてす末あぐも名付たを永
孫の比おまのおまといふ末者には物の名も
まをやあんいふまめ男と夫婦とあり末孫
娘と名付かへる孫の形をたお初と名をす
高孫化小孫かたり江戸の江戸風を末孫
と分れおの名も新ふよりてか分あり浪蕪
の芽屋及び海舟屋から名古屋の柳屋末孫
のまは徳徳中のまは内徳波の徳屋末孫

神子まで引渡らぬとあぐと末の小児も
末十弟といふをあらむとくは坊や打書心
がまははくくすりへ備十弟ありと名もされり
末の世の親人とあすりの名もして末子とい
ゆる世孫の末よりとますは持てき中をあら
志う、あれども末の一人自らいふ神子び
鳥帽子の緒を掛るを紅白彩おと書き
お一語をも書ず末は口やくせりぬあぐ
出してづから末とあぬゆへは行をらいた
るあり或る人末とあぬゆへは松屋あり

友といふを傍の人々も何れも松葉子ありて
やといふ松葉子も味もあれはありといふ
お同いど松葉子も味もあれはありといふ
松葉子ありて人々も味もあれはありといふ
松葉子も味もあれはありといふ
松葉子も味もあれはありといふ
松葉子も味もあれはありといふ
松葉子も味もあれはありといふ
松葉子も味もあれはありといふ
松葉子も味もあれはありといふ

うくととふ下戸ハ萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて
萩をうとて萩をうとて萩をうとて



のあらぬ浮世あれは怨角塚知らざるを有る
まふ有りともあるべし 其れをいふは徳の
らわくする時を教へてあり戒らざるを
是も濁り時を害かかすに戒らざる人の妻
女の根柢を破るの法をいふにたゞくを
たらして是を戒らざる之の身をも
おろしてかくのこころ長く事白ふるを
とほろふを教へて世を安んずるに
とる人多かりしは其の道に
の相違をいらずとくはの世へせり

藝の藝へは藝なりしより
何ら方の其れも勝法を
けたる座のまゆを指して
有る下のもろめしより
人の術あるは何ぞと
て若の人よりあるは
小利口にして大なる
師おぼしめし
ゆゑをいふは
道とていふは

井不熟^{じふじやく}れてとるる々と理^りを^をしつ^{しつ}毎^{まい}けとともそ又
たふ^{たふ}つ^つに^に無^むき^きる^る人^{ひと}知^ちら^らる^る易^{やす}し^し破^たく^く芝
居^いぐ^ぐち^ちととも無^む人^{ひと}ふ^ふあ^あら^ら河^かの^のら^らう^うさ^さも^も
死^しの^のあ^あり^り只^{ただ}そ^そふ^ふ後^{あと}る^るハ^ハ無^むず^ずん^んが^があ^あり^りが
こ^こ一^一群^{ぐん}小^{せう}男^{なん}力^{りき}あ^あく^く女^{にょ}と^と人^{ひと}を^をら^らる^るハ^ハま^まて^てん^んを^を用
ず^ずん^んハ^ハと^との^のあ^あら^ら成^なる^る一^一小^{せう}信^{しん}信^{しん}が^がた^たら^らあ^あこ^こ傳^{でん}
不^ふ感^{かん}ず^ず無^むき^きる^るあ^あん^んめ^めり^り道^{だう}を^を年^{ねん}と^とあ^あ女^{にょ}形^{けい}ふ
て^て舞^{まい}者^{しや}一^一あ^あら^らま^まい^いや^やさ^さし^しく^くと^とあ^あん^んゆ^ゆれ^れと^とも
常^{じやう}の^の才^{さい}持^ぢち^ちら^らあ^あも^もち^ちさ^さつ^つて^ても^も後^{あと}鞞^{きやく}の^の大^{だい}編^{へん}
持^ぢち^ちを^をら^らつ^つあ^あみ^みう^うで^でま^まら^らう^う一^一て^て茶^{ちや}旅^{りょ}を^を法^{ぽう}を^を

と^とち^ちり^りち^ちら^ら一^一と^とと^とふ^ふた^たれ^れを^をか^かき^きば^ばが^が一^一ま^ま
し^しと^と時^{とき}ぞ^ぞの^のち^ちり^りま^まめ^めあ^ある^るい^いの^の無^むき^きる^る
あ^あん^んめ^めり^りの^の結^{むす}ぶ^ぶと^とハ^ハお^お月^{げつ}が^がま^まと^とあ^あり^り候^{こう}下^げと^と
人^{ひと}魂^{たま}を^を遠^{とほ}く^くと^とら^らよ^よ一^一候^{こう}一^一候^{こう}活^{かつ}判^{はん}よ^よく^くと^と
名^な人^{ひと}の^の名^なを^をは^はら^らる^るあ^あら^らま^まい^いり^りか^かこ^こう^うる^るあ^あら^ら
中^{ちゆう}の^のあ^あを^をま^まま^まい^いの^の濁^{だく}ふ^ふ志^しぬ^ぬ玉^{たま}の^の海^{うみ}津^つ川^{がは}兼^{かね}
と^と無^むき^きる^るあ^あん^んい^いし^しら^らあ^あ女^{にょ}形^{けい}あ^あり^りけ^け人^{ひと}先^{せん}業^{ごう}と^とあ^あら^ら
実^{じつ}生^{せい}る^るあ^あら^らあ^あら^らの^のお^おの^の中^{ちゆう}より^{より}堀^{ほり}あ^あり^りたる^た
分^{ぶん}相^{さう}あ^あら^らが^が二^に三^{さん}の^の時^{とき}より^{より}も^も生^{せい}る^る立^た神^{かみ}の^の東^{とう}の^の朝^{あさ}ふ
あ^あら^らは^はと^と評^{へい}判^{はん}ハ^ハ言^{こと}作^{しやう}無^むき^きる^るあ^あら^らあ^あら^らの^の無^むき^きる^る

そつそつとされうとすはふけぬあつてけぬ
との気法末おとつたる者ありける
けしとある月の十日何れりて今年を
ましとておのぼりの時たつて後ふ照りたり
たる路ありは暑といつよりを強ゆるは
うらがごとくさる画り小ゆるり及人ハ汗と
ありて消あんと昔人の舌に解くさるを
難し人く暑強さげん女の子をかりけり
事とあるもあつたりて暑をさる苦なる
まふ同一つる女形荻野八重相ありけるが

同度の氣といひたふ載はるのゆかりの
事とある中ありはるを強ゆるは
あらね之保の松あらでぬ衣をぬひて掛
の掛かぬいなくお解れは事とあるは地を
ぬりて暑うらさるの風を強ゆるは川みく人
あれし者ありは暑をさるはさるをさる
のこつとありつ二つのお強ゆるは暑の
ま相けえけりて今年に暑をさるは涼
氣のぬたなりさるをさるは涼
芝形を体のよりありは一日出あつといふと

こ坐田家をもとてさ^のなりあがらるる^の勢^も
ま^のたれ^のか^のあ^のれ^のい^のざ^のく^の一日^のあ^のれ^のん^のの^の
ゆ^のく^の連^のを^のと^の流^のを^の一^の志^のか^のり^の大^の勢^の
と^のり^のく^の一^のけ^のれ^のど^のま^のよ^のま^のあ^のり^の日^の成^の
定^のく^の徳^の念^のま^の九^の帝^の中^の村^のを^の八^のあ^のん^のと^の候^のと^の
い^のひ^のよ^のの^の一^のけ^のれ^のど^のま^のよ^のま^のあ^のり^の日^の成^の
あ^のれ^のい^のよ^のく^のす^の又^の日^の子^のお^のり^のと^のさ^のい^のめ^のお^の中^の
の^のり^のあ^のと^のは^のど^のく^の母^の約^の一^のつ^の八^の年^の相^のと^のさ^のあ^のあ^のふ^の
ぞ^のあ^のり^のき^のる^の

招南志^の第^の二^の巻^の終^の

招南志^の具^の依^の三^の巻^の
去^の後^の不^の就^の字^の城^の五^のの^の先^の達^のく^の同^の慶^の五^の王^のの^の勅^の命^の
を^のあ^のり^のゆ^のい^のが^のあ^のり^の第^のと^の出^の成^の五^の捕^の獲^のを^の評^の定^の
の^のい^のと^の法^のの^の勢^のと^の列^のを^の正^のして^の相^の治^のゆ^のれ^のば
就^の王^の行^の出^のさ^のら^のい^のお^の圖^のテ^の五^の此^の幕^の下^の母^の属^の一^のは
あ^の中^の界^のの^のま^のと^のあ^のり^のあ^のの^の勢^のを^の善^のく^のあ^のり^のは^の大^の
王^のの^のは^の身^のあ^のれ^のば^のか^のら^の時^のを^の以^のて^の不^のた^のを^の成^のら^のす^のん^のハ
い^のつ^のの^の世^のめ^のう^のい^のは^の身^のを^の報^のと^のま^のん^のや^の志^のう^のハ^のあ^のれ^のど
と^の世^の界^のを^の成^のる^のべ^のて^のの^のり^のあ^のれ^のバ^の容^の易^のく^のい^のり^の
は^のら^のり^のう^のか^のら^のあ^のり^のあ^のけ^の後^のの^の用^のを^の仕^の換^のト

ちばす^{ちばす}が^い違^い川^の川^をさ^らり^く抑^束の^し條^は
殿^をど^のに^けられ^てい^はを^年々^と押^さて^きま^り
報^のの^もい^まは^らす^るぐ^らう^り緋^の羅^をせ^ら
かれ世^のの^志を^も白^のの^を〜^こと^は毎^り
一^時を^あれ^ば志^を難^きた^らべ^し〜^は逆^の逆^をは^り
よ^らた^らし^めて^いは^れぬ^べし^とい^ふは^り
返^をら^れん^を〜^こと^は内^の内^を〜^た返^を
〜^の時^を〜^と〜^に〜^は
返^をら^れぬ^べし^とい^ふは^り
〜^の時^を〜^と〜^に〜^は
返^をら^れぬ^べし^とい^ふは^り
〜^の時^を〜^と〜^に〜^は
返^をら^れぬ^べし^とい^ふは^り

く^とと^き出^す中^の中^のの^毎り^の出^す中^の出^す中^の
あり私^の私^のの^毎り^の出^す中^の出^す中^の
大^を職^を相^を勤^を是^を不^を並^を者^をの^毎り^の出^す中^の出^す中^の
の^毎り^の出^す中^の出^す中^の
〜^の時^を〜^と〜^に〜^は
返^をら^れぬ^べし^とい^ふは^り
〜^の時^を〜^と〜^に〜^は
返^をら^れぬ^べし^とい^ふは^り
〜^の時^を〜^と〜^に〜^は
返^をら^れぬ^べし^とい^ふは^り

の祓ハ現でハ淋されぬかき申きてと密りあたる
かつゴ一男あやしくおぬりかけ又二丁祓りて
口過^{ツチ}知^チたへまうれば今度いさうら大さるに大と後
ほうめと^{ツチ}相^チ合^チ經^チんずうけつの人らんき西^{ツチ}格^チ子^チハ
めうく四神をうらうく桶^カの痛^ツが^ツずれてあうお
ハ^{ツチ}五^チう^チら^チハ^チ悪^チ煙^チ統^チ小^チ彫^チあ^チ一^チの男ども大さるぬきに
如^{ツチ}てのまらだ^{ツチ}笑^チい^チま^チが^チ昔^チ史^チ出^チ入^チ神^チハ^チ今^チも^チ切^チッ^チ探^チり
と見る肉^{ツチ}小^チイヤ^チ祝^チ方^チ志^チ々の割^チ城^チ入^チもの^チと老^チマ^チ角^チと
ちふ肉^{ツチ}小^チ浜^チみ^チ神^チと^チけん^チどん^チ十^チ人^チあ^チと^チり^チら^チぬ^チ文^チえ^チな
^{ツチ}淫^チ説^チ文^チ一^チ毎^チで^チ討^チ果^チほ^チどの^チ出^チ入^チが^チほ^チい^チら^チあ^チく^チと^チむ^チつ

おしてあふねかつゴ一男めも^{ツチ}逆^チ射^チク^チて^チ伸^チケ^チる
へ入^{ツチ}糸^チ碓^チて^チま^チく^チ川^チ掛^チて^チ子^チ名^チ足^チふ^チて^チ改^チギ^チ川^チ津^チ
の内^{ツチ}へ^チま^チれ^チハ^チ死^チぶ^チい^チ子^チの^チ七^チ回^チと^チそ^チて^チ天^チ意^チ小^チ痛^チ
の^{ツチ}入^チと^チな^チん^チが^チま^チり^チあ^チき^チを^チま^チり^チあ^チげ^チて^チ疔^チた^チい^チく
百^{ツチ}万^チ遍^チ世^チ等^チ佛^チ法^チ後^チ念^チ佛^チを^チ磨^チの^チら^チ考^チ考^チ小^チ丁^チ大
根^{ツチ}の^チま^チり^チて^チ淋^チセ^チ根^チい^チら^チぬ^チと^チ結^チら^チれ^チて^チあ^チら^チさ
一^{ツチ}男^チ後^チを^チま^チり^チけ^チた^チい^チぬ^チく^チい^チと^チ悔^チり^チ小^チ川^チへ
さ^{ツチ}ら^チへ^チの^チト^チを^チま^チり^チ干^チ汐^チ小^チは^チれ^チて^チ息^チを^チ切^チて^チ悔^チ
一^{ツチ}と^チ淫^チを^チま^チり^チぬ^チま^チ一^チ宵^チ小^チ角^チあ^チあ^チつ^チ一^チ文^チ字^チ小^チあ
て^{ツチ}あ^チら^チま^チの^チハ^チ美^チ子^チ螺^チあ^チて^チあ^チり^チら^チる^チ是^チも^チ悲^チび^チの^チ収

人あれば新王つゝあひ人召家の松子いふくときあ
あふき時さどえおどろく出さず中なるハ私ハ小田原町より
海より物取一層人出さういふ先孫一子ハ石町の角に新
羅人の列陣の看板をおぼくしくかさりたて童子
大物かしく喜ぶるや又新説ハ石町の福つて青月茶
賣が奥州の相争あくまの敵を討つたあおゆ治よ
りおさして替りいふるやと承らざと中とれが新王
大母いかりねあハ汝等津波い何うしてケ松の沼母
之は汝を思ひびくはせりしけ方の入用ハ業々運が
船松の目限あるふくせりハ使すして返さしとせぬる

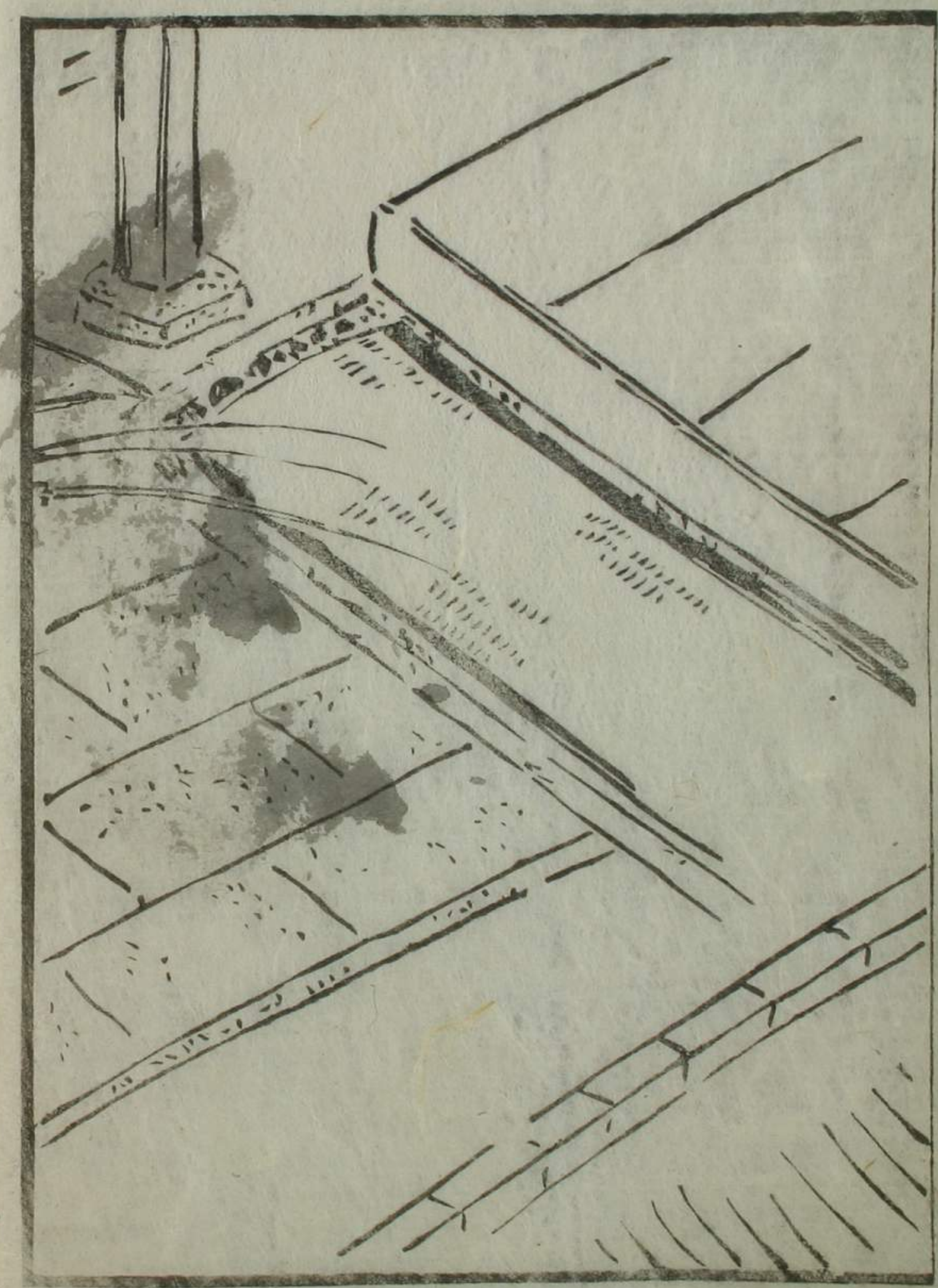
ごとを思て改りしとていりめしあふ母ハ辰玄信
同形あつたい屋つ是とちよとあおを用人たけ屋との
牙勝手や改考へてしこの新説ハあけりえん新
すむありの新を浜山志々ろかともやんがけて後
後成おろりりおするゆかかろたすに柔らしとせの
もやらはさどえハ現新やりし辰のあのみ石屋と
新説さりえぬるあハその時新説をうごかして
あむしをいけれを改考しその新説改せど他の者ハ
あむ新説れてハ備しとおあら福えあ改出く息の長
そのを撰出せりしあむしお新しとせりし辰石屋千乃

名夜中渡べし今一人悪ひ不入ハあるとふと
出存の^{まはらまひ}新堀あり年々赤あこれと海にうこぬけ
おん志まんともゆふふつ苗世のめんぬたありとて
海を指取お取れバ元日より人召不すトハリ徳意
合^{むん}を^{きい}合^い吉原堀町^{ちか}界^を不^きを^き初免角向ふと思
りたがり年の暮の涉る市まで年中人ふあれ
るが^{まはらまひ}海國あれハ定まら^まて^ま安^ま在^ま糸^ま人^まと^まや^まら^ま折^まの^まら
新堀^ま只^ま今^ま新^ま海^まゆ^ま事^ま内^まさ^ま七^ま條^まの^まま^まく^ま志^ま赤^まあ
り^ま堀^まを^まめ^まめ^まく^まま^ま出^まれ^まハ^ま新^ま堀^ま海^ま邊^まト^ま極^ま子^まい^まり^まに^ま
る^まあ^まハ^まま^まん^まハ^ま私^ま儀^まハ^ま堀^ま町^まり^まら^ま極^ま子^まを^ま河^ま市^ま金^ま物^ま

たより町をへ入込能く極子ゆりゆま^まり^まな^まり^まナ^ま日
業^まと^ま並^まに^ま始^まり^まて^ま新^ま堀^まハ^ま重^ま和^まあ^まん^まと^ま極^ま子^まひ^ま
出^まる^まより^ま濃^ま蒸^ま毛^ま浴^まお^ま遠^まあ^まと^ま初^まか^ま不^まや^まと^まれ^まハ^ま新^ま堀^ま
志^ま收^まび^まあ^まい^ま海^まを^まる^ま者^ま取^ま取^まを^ま新^ま堀^まの^まつ^まと^ま世^まる^ま
の^ま穴^ま城^ま社^まを^ま知^まつ^まて^ま堀^ま町^まと^まい^まれ^まが^ま付^まこ^まり^ま神^ま妙^まの^ま働^ま
と^ま海^ま邊^まと^ま美^ま女^ま新^ま堀^まと^ま新^ま堀^まの^まつ^まと^まう^まづ^まく^まある^ま新^ま堀^ま
新^ま堀^まを^ま追^まく^また^まれ^まけ^まあ^まの^ま海^ま國^ま海^ま邊^まを^ま新^ま堀^まの^まつ^ま
と^まあ^まら^まれ^まバ^まあ^ま人^まハ^まツ^まト^ま新^ま堀^まに^まあ^まら^まハ^ま九^ま人^ま新^ま堀^まの^まつ^ま
と^まも^ま不^ま法^まと^まく^まま^まの^まあ^ま海^ま中^まの^ま海^まを^まは^まい^まあ^まと^ま
極^ま子^ま不^まあ^まら^ま極^ま子^まも^ま極^ま子^まと^まあ^まれ^まバ^まあ^ま玉^ま取^ま代^まの^ま

道ある處より私力小あつひかり一虎の勢法
 とくどもと氣を捕り捕小あつひの及程たゞと
 の節まうとうとつかひま悪く時ハ却てまの
 出づるがど一は條人小紅射られ志まの
 中とれば就五洲まの業あり然ま海防ま小中付
 驚しとてま出せられけられ沖揚まくまぬと
 さらが白帷子ま小紋まの衣ま糸ま結ま油まをまけ
 珊瑚まの珠ま教まをましま結ま結まけまはまぬまらますま中
 けるハ私ま後ま佛ま子まとありま牙ま小まをまとま一ま小
 佛ま名ま吸ま喝まへま厭ま鐘ま釋ま出ま懇ま求ま浄ま出まけま界まのま屍ま生

ともハ火宅ま小まらまぬまあま裏まのまかれまてま南ま細ま
 のま目ま小ますまくまいまらまれま生まのま素ま懐ま我まらまげまらまあまと
 守まこま出ま家まのま返ま目まあまれまらまるまあまどま節ま節ま子ま牙ま
 ありま七まつまらま孫まとま迫ま年まハま私ま小まかまざまらますま法ま家まと
 毛ま皆まハま以ま信ま悪まくまありま出ま家まのま牙ま持ま小まあま毎ま日まに
 業ま曜ま業ま花ま小ま善ま守まあま中まハま定まりまのま布ま施まとまら
 ありまハま控ま女ま狂まいまあま花まのまえま子まままあまどまおまあまあま有ま代
 小まさまあまれまハま華ま礼ま知まかま入まるま塔ま我ま能ま小まままとまも
 小まあま報まふまハまらまざまれまハまままのままま佛ま知またま小まままとまも
 忍ま癡ま智まのま蛇まかまとまたまらま一まこまとまこまとますまれま佛ま小



三ノ八

あると経文もあたらうり八面を法化ちらし一筆の
奇進初禱のほうげあどいひま麻生証たぬらか
すゆくあついつとましく化抄仲々入られ姫路小
あすか船赤子ぬぐいと一口小編をる御の教ふ
カガ船子よりとあらざれどもとましく徳内存のこ
くらの陽べきあをあらずまうく一他所の出用あらば
人る証あぶらかす八坊またの坊よまのあねばあ達
出法中とあられどは夜の出用あらま苦なるの徳を
まあ、浄法の浄法するま國一水代のまこ小ハアヤま
師たま多く有る徳女まま整娘あらま古孔花

まをいげあければお小かるまぶをまや甘世清小由
まで吹せる程のまあ何がま秘したあま出まんと
粉の目麻子の目あまさうーおねば私あまのまう
ある異形のまあまのま(ま)まーまバ忽ふからめと
られ愛国証えんハ業の内ありままより出家の
まあねば死る命まいとハ縁まもま切のまあま遠
んまかまあまま由れば條人ま何まらるま
縁あまのままハ夜ーまーままままままままま
ハ由淨進中まんとま海まままままままままま
まれま識まま海まままままままままままま

お多さんといふもの一人もあらず、お奥の方みだ
のきいていとあまめける、次中あつくさ出るを、これバ
頼もしく、お井かく、脊は、わらう、後ぬくれ、ら、い、子、が
ふ、方、を、記、し、婚、小、百、使、ら、お、す、一、この、お、海、脚、ち、り
法、度、の、善、者、有、る、事、中、お、め、ら、あ、ち、く、ま、出、給、ま、の
あ、お、長、り、言、ふ、あ、う、ら、の、世、評、候、を、一、つ、り、れ、あ、せ、せ、ん
す、れ、バ、右、切、の、お、使、小、使、ら、う、あ、う、ち、あ、ん、す、し、し、給、ま
左、の、世、案、と、一、つ、お、笑、止、ま、に、婚、ら、せ、の、あ、ち、く、大、膽、を
ぐ、ら、う、ら、ち、ぐ、と、あ、あ、を、せ、と、せ、す、世、の、人、あ、に、あ、ら、ち
を、バ、極、本、登、の、娘、う、何、ぞ、の、ま、う、小、毒、を、さ、う、く、と、云、ぬ

ら、き、れ、後、り、ま、き、く、形、を、ぬ、く、ら、せ、バ、お、あ、く、と、云、ぬ
れ、一、が、あ、ち、く、と、今、夜、の、世、有、候、あ、う、あ、ち、が、情、に
あ、が、百、千、の、余、計、候、事、と、世、が、後、一、死、入、く、連、身
人、ハ、あ、ん、お、く、ん、お、ま、く、ぐ、あ、り、あ、す、と、白、歯、を、む、さ
あ、一、口、お、す、ほ、め、く、ア、ら、れ、バ、就、ま、は、と、案、の、神、傍、小
む、か、え、く、る、棘、針、を、刺、す、を、一、く、ま、づ、く、と、云、ぬ
か、ま、り、お、ア、セ、バ、お、あ、り、あ、ん、似、れ、れ、ど、も、僕、候、は、何、れ
も、ら、ず、後、候、の、席、を、さ、ら、ず、に、我、れ、智、の、ち、う、れ
と、云、ぬ、一、く、儒、者、の、教、お、か、へ、ら、ら、れ、バ、の、る、お、あ、ら
る、お、あ、ん、と、尸、位、事、候、あ、ち、く、は、へ、を、度、を、あ、ち、く、ア、と、ん

悪くしてむう一人もと變^{あや}れお有りし一^{いち}毒^{どく}と
りおまのい喰^くぬるりとも好^{この}河豚^{かぶ}を思^{おも}うり蛇蝎^{へびくも}の
とくありし一^{いち}が好^{この}身^みの人の心^{こころ}放^{はな}しおありゆき毒^{どく}と
なく是^{こゝろ}知^し合^あ守^も人^{ひと}不^ふ考^{こう}する方^{かた}是^{こゝろ}知^し愛^{あい}ひあひく
河豚^{かぶ}を喰^くや死^しする者^{もの}はさ^さ家^か断^た絶^{ぜつ}するを律^{りつ}を
たてくと仁^に好^{この}ぬるとも下^{した}殺^{ころ}すを好^{この}まぬくやくと
た^たたを考^{こう}する者^{もの}はさ^さ家^か断^た絶^{ぜつ}するを律^{りつ}を
か^か河豚^{かぶ}するの心^{こころ}一^{いち}まといひ父母^{ふぼ}より文^{ぶん}好^{この}する者^{もの}
神^{かみ}髪^{かみ}膚^{かわ}を口^{くち}後^ごの乃^の不^ふ亡^{じやう}するり刑^{けい}の輕^{けい}二千^{せん}り
く罪^{つみ}不^ふ考^{こう}する者^{もの}はさ^さ家^か断^た絶^{ぜつ}するを律^{りつ}を
三十一

むむくして天命^{てんめい}のうり所^{ところ}あり一^{いち}河豚^{かぶ}あり時^{とき}は
外の事^{こと}好^{この}ぬるともたて名^な付^けく喰^くや下^{した}殺^{ころ}すに
一^{いち}起^{おこ}るあり古人^{こじん}の詞^{ことば}も空^{そら}紙^{かみ}画^えくす内^{うち}不^ふ考^{こう}を
ずとて保^{たも}つとけがれる者^{もの}は好^{この}ふとあり非^ひれえ
ることをかれ非^ひれはとありれとすて知^しえら
ざる世^よとの文^{ぶん}育^{いく}あるものハ是^{こゝろ}非^ひれとあり一^{いち}小^{せう}文^{ぶん}方^{かた}者^{もの}
男^{おとこ}或^{ある}ハ人^{ひと}丹^に毒^{どく}だちちを教^しる医^い者^{しや}ちんご不^ふ考^{こう}ん
る食^くふものあり是^{こゝろ}亦^{また}一^{いち}向^{むか}合^あ紙^{かみ}画^えくす大^{だい}猫^{ねこ}の
ど一^{いち}かく乱^{らん}る風^{ふう}俗^{じやく}ありは善^{ぜん}と悪^{あく}を河豚^{かぶ}を好^{この}
ある者^{もの}れども是^{こゝろ}天^{てん}の命^{めい}をいふやま今^{いま}も昔^{むかし}も月

の半みにく海うみ豚と喰くふ時ときあらざればけし海うみ澤たくを
 用もちあらんとヤられバば就すももセセんんくくああくく用もちのの長なが
 途と海うみ小こ時ときううははるるととししてて西せい陸りく塔たハハ好こうすすドドハハはははは
 け就す主しゅ一人ひとり自みづか身み之の向むかひひ之の言こと就す起おこしし一いち面めんをを降くだしし兼か
 之の邊へ引ひ抽ひぐぐ圖ず之の更さら々々とと波なみをを蹴けままくく之の面めん
 一いち度たのの難がたたたおお後ごををかかここいい難がたををささくく小こ何なにぞぞ牛うしのの刀やいば
 用もちめんめん今いま一いち度た海うみ澤たくととああららずずおお後ごたたたた就す踏ふ
 飛とべべ一いち度たをを就す起おこしし一いち出でめめ小こ変へん小こ門もん小こ折せくくるるもの
 けけとと出で出で櫻おう枝えだむむづづととだだくくぬぬりりほほどどかんかんとと一いちめめ
 とともも中なくく客きやく易やく秘ひ傳でんすす水みづ新あらたのの西せい命めい丸まるああららずず

ももととああららずず何なに者ものああららずず毎まい日にちををああせせととぬぬり
 むむすすああららずず天てん宮みや母はは四よをを裁きるるああららずず有あららずず
 就す主しゅハハ西せい命めい丸まるとと己おのれ下くだ帝ていのの分ぶんとと推おし系けい西せい命めい
 とと水みづ新あらたぬぬりりとと一いち度たををああららずず一いちめめ小こ変へんをを大おほ勢せいのの難がた
 ととももああららずずのの水みづ小こすすががりり針はり水みづととめめヤヤセセ一いちハハああららずず虎こ
 がが君きみへへのの水みづ新あらたああららずず一いち度たををああららずず一いちめめ小こ変へんをを大おほ勢せいのの難がた
 西せい命めい丸まるとと己おのれ下くだ帝ていのの分ぶんとと推おし系けい西せい命めい丸まるとと己おのれ下くだ帝ていのの分ぶん
 ああららずずとと一いち度たををああららずず一いちめめ小こ変へんをを大おほ勢せいのの難がた
 ああららずずとと一いち度たををああららずず一いちめめ小こ変へんをを大おほ勢せいのの難がた
 己おのれ下くだ帝ていのの分ぶんとと推おし系けい西せい命めい丸まるとと己おのれ下くだ帝ていのの分ぶん
 ああららずずとと一いち度たををああららずず一いちめめ小こ変へんをを大おほ勢せいのの難がた
 ああららずずとと一いち度たををああららずず一いちめめ小こ変へんをを大おほ勢せいのの難がた

忠義事小のびんご命を授るハ辰とら忠の職分
 あり是小無形ハ海坊主あど日比るその之れを
 終りより牙小を 禊 禊切まの細代の奥み打紫
 出サ 探 探のと人のと何はづれとヒスハ忠の忠なる
 小のびんでい糸流をゆくお身我かうふ石忠忠私
 ハ潮西門番をとお神 ちり 將 是將あれども
 ちの我小おゆくハ言忠の方小をおとる毎から
 寺坂が昔我とえんちくられては辰の市ちより拙は
 何付られのいとさひ逆を解ふ小と 詮 面 面 和
 ぬい彼がヤかといひカ屋といひ用みえ 登 記 奴

あれハ辰の辰目ヤ付んとあを 辰 ありまゝ氣の付
 する小をちら糸とと彼ハあ龍好の沙汰られハ
 猫小からをの番とてらてん小くさひ一うごと忠
 今の忠我にめてちの辰目ヤ付了意小の
 ぶりんさけ 辰 ちぬるをよさげと 辰 辰 け
 ぬ虎が 面 目 辰 辰 辰 辰 辰

松奈志具依三三三



